総　　括

林　　哲　介（京都大学高等教育研究開発推進センター教授・副センター長）

（林）　まとめをしろと言われても難しいので、最後に勝手な感想を一言いわせていただいて、終わりにさせていただきます。

去年、認証評価の基準案が最初に出てきたときに、我々大学の中で若干意見交換したときに、ある先生がそれを見て、「これは車の車検と一緒ですな」とおっしゃったのです。そのときに私は、そんな無責任なことを言ってはまずいのではないかと思ったのですが、それから以降、ずっといろいろ考えてきて、今日のお話も聞いてみて、今、「あ、これはやはり車検だ」と思っています。スポーツカーであろうが、トラックであろうが、バスであろうが、あるいはお母ちゃんが買い物に行く軽自動車であろうが、どんな目的で、どんな性能を持った車であれ、ちゃんと車検を通っておくことが必要だということと、実はこれは同じなのではないか。最近、そういうふうに考えてみようと思うようになりました。そう思わないと、評価に振り回されるように感じます。先ほどお話がありました長期的な見通しを失うのではないかということですが、まさにそのことが起こってしまうと感じるのです。

今求められている認証評価や、あるいは国立大学の評価を軽視するつもりはもちろんありませんけれども、我々大学教員の主眼としては、これは車検だ、これは少なくとも通っておかないといけないことだ。けれども、最も重要なことは、それぞれの大学の長期的な見通しをそれぞれの大学がどう見ていくかということであり、そのことが個性化だろうと思います。

先ほど、前田先生でしたか、大学はおとなしかったのではないか、大学は受け身になっているのではないかというご指摘がありました。この間の意識を思い出してみますと、確かにそうだったかもしれないと感じます。アカウンタビリティということが言われますが、素朴に考えたときアカウンタビリティというのは、大学を卒業していく一人一人の学生諸君が、この４年間なりの大学生活を振り返って、自分は非常にいい大学生活を送った、いい勉強をした、いい教育を受けたという、圧倒的多数の学生諸君がそう言ってくれることが最大のアカウンタビリティだと今は感じています。そういうことをうまくまとめて表現することができれば、これは車検を通るということだと、私は最近感じるようになりました。

そういう意味で、これからいちばん重要なことはまさに大学の個性化であり、評価においても、大学の個性をどう発揮して評価に対応していくかということが、いちばん基本的なことだろうと感じるようになりました。非常に個人的感想を申し上げて恐縮です。しかも、評価をする側ではないことを最後に申し上げてしまいました。まとめにはなりませんが、終わりの言葉の代わりにさせていただきます。どうもありがとうございます。

（大塚）　どうもありがとうございました。

私も評価を担当してきた者として、言いたいことはむずむずしているぐらいいっぱいあります。そして、今日は、基調講演から話題提供に至るまで、非常に中身の濃い、充実したシンポができたこと、本当に感謝いたします。まだいろいろ議論が尽きないところ、かみ合わないところがあったのではないかと思いますけれども、評価にはそれだけいろいろな視点がありますし、また、それこそ評価自体もますます多様になりつつあるはざまに今はあるのかと思います。

しかし、グランドデザインにも書いてありますように、1.5倍の予算を目指すという、高等教育に1.5倍投じるのが国際水準だそうでして、それを現実に我々大学人が獲得できるかどうかという意味でも、今は一つのチャンスが来ているのだろうと思います。このチャンスを生かすためにも、大学評価に私たちがちゃんとつきあっていかないと、そういうチャンスを逃すことにもなりかねませんので、この機に、評価する側・される側、いろいろな立場がありますけれども、それぞれの立場から意見をぶつけ合って、よりよい大学を作り上げていくきっかけになれば幸いとするところであります。

最後に、基調講演の木村先生、それから話題提供者の方々に、盛大なる拍手をもって感謝の意を表現していただけ

ればと思います。今日はどうもありがとうございました（拍手）。

それでは、５時半から、２階に上がっていただきまして、懇親会を行いますので、どうぞ多くの方にご参加いただきますようお願いいたします。